

## 戦後復興期における「北上山地」像

岡 恵介\*

How the “KITAKAMI mountain country” was described in the Showa postwar revival period

OKA Keisuke

### 1. はじめに

岩手県を南北に貫く北上山地に暮らしてきた人々は、昭和史のなかで、常にその風土性、自然、地理交通、社会経済構造、文化・慣習、パーソナリティ、医療保健、近代化・開発の度合いなど関連づけられながら、語られることが多かった。このとき、しばしば常套的に用いられたのが、「チベット」を地域の形容に用いる表現である。この表現が、どのような過程を経て多くの人々に共有され、あてはめられる地域はどのように変化していったのか、それに対して当該地域の人々はどのように対応していったのか、そしてこれが北上山地にもたらしたものは何だったのかについて、考えていきたい。

筆者は昭和 57 年 2 月から北上山地の岩泉町安家地区をフィールドとして調査を開始し、現在まで同地区を中心として聞き取りと観察を主としたフィールドワークを継続しつつ、近年は北上山地についての出版物や新聞、映画などにおける描かれ方と、「チベット」を用いた表現の事例についても興味を持ち、資料の収集をすすめてきた。

なお本研究の資料収集には、財団法人さんりく基金の助成研究費の一部をあてた。

### 2. 日本人のチベット観

元来、日本人にとって「チベット」とはどのような存在であり、どのようなイメージでとらえられてきたのだろうか。ここではまず、日本人と「チベット」とのかかわりの歴史についてみていきたい。

かつてチベット（吐蕃）は、755 年に起きた安史の乱に乗じて、長安を 10 日間占拠し、781 年から以後 70 年間、敦煌を支配下におくような強国であった。日本におけるチベットに関する記録は、「続日本記」における 753(天平勝宝 5)年の遣唐使についての記述まで遡ることができ

---

\* 東北文化学園大学教授 Professor of Tohoku Bunka Gakuen University  
e-mail: koka@pm.tbgu.ac.jp

る(江本、1994)。遣唐使が玄宗皇帝を朝貢した時に、席次が吐蕃や新羅より末席におかれたのに抗議し、新羅より上に替えさせたというのである。言い換えれば当時の日本は、チベットの實力を自らよりも上と認めていたと解釈することもできる。

近代以降、日本人がチベットを身近な話題としたのは、河口慧海の「西藏旅行記」(1904、明治37年刊)が発表される明治終わりのころからだと思われる。18世紀の末以降、イギリスはチベットとの通商に強い関心を寄せていた。以前はラサと強く結びついていたヒマラヤの小国が、条約や協定などを通じてイギリス領インドに従っていく趨勢に、チベットは自らもイギリスの植民地となるおそれを感じていた。一方、モンゴルや中央アジアを支配下におさめることをもくろむロシアは、チベットへの接近を試み、南下のチャンスをつかみはじめた。このことはロシアの南下政策を警戒していたイギリスに、強い脅威を感じさせた。チベットがロシアの植民地になるようなことがあれば、中央アジアにおける植民地支配の勢力バランスが崩れてしまうからである。

そこでチベットにおける支配権を確立するために、ヤングハズバンドの率いる英国軍が1903(明治36)年にチベットに侵攻する。英国軍が首都ラサに迫ったため、ダライ・ラマはモンゴルに亡命を余儀なくされる。その後イギリスとチベットの間にラサ条約が締結され、チベットは事実上イギリスの支配下に入った。しかし次には清がチベットをねらい、モンゴルから戻ったダライ・ラマはまたすぐにインドのダージリンに亡命し、イギリスの保護を受けなければならなかった。

1902(明治35)年には日英同盟が締結され、1904(明治37)年2月には日露戦争が勃発していたこの時代、アジアにおけるイギリスとロシアの動きに日本は今よりもずっと関心が高かった。河口慧海にとっては、仏教者として日本に正確で完全な經典をもたらすためのチベット潜入だったが、彼の1900(明治33)～1902(明治35)年にかけてのチベットでの見聞は、イギリスのチベット侵攻(1903年)直前の姿を記録したものとしても重要な意味を持っていた。1909(明治42)年には、「西藏旅行記」の英訳版「Three Years in Tibet」が出版され、むしろ海外で高い評価を得て引用・参考に供され、HRAF(人間関係地域資料)のチベットにおける文献として、満点の評価がつけられている(川喜田、1981)。

日本でも当時、鎖国し外国人を拒絶していたチベットに潜入した慧海の手記を、朝日、毎日、時事、読売、国民各新聞のほか、地方紙も連載した。講演依頼も殺到して各地で講演会が催され、東北地方でも、1903(明治36)年に仙台、石巻などで、1904(明治37)年にも仙台で2回、白河、弘前、青森、秋田、能代、大館、二本松、山形、米沢で講演・講習会を行なった。

当時の社会風刺メディアであった「萬朝報」「滑稽新聞」「團圓珍聞」では、河口への批判・誹謗や、慧海が描いたチベットの珍しい風俗を興味本位に取り上げ、これをパロディー化した記事も掲載されるほどの社会現象となった。複数の馴染み客を持つ芸妓のことを、チベットの「一妻多夫」になぞらえて「西藏芸者」という流行語まで生んだという。

慧海が日本にもたらしたチベットのイメージは、必ずしも良いものだけではなかった。たとえば「團圓珍聞」(1903.9.12)では、ヤクの糞で食べ物を煮るとか、一妻多夫、といった日本とは

異なる文化が、面白おかしく取り上げられているが、こうした読み方が当時のチベットをめぐる風潮の中に存在していたのであろう。

江本(1994)は『日本人のチベット観は、河口の書によってかたちづくられた』と述べ、『チベットの風俗について、「汚穢」「奇態」「不潔」といった表現をひんばんに使い、・・・日本人の「秘境趣味」をおおいに満足させる要素にあふれていた』とし、『河口の入蔵の目的はあくまでも大蔵経を手に入れることにあり、チベットそのものから何かを学びとる気持ちは、あまりなかった』としている。戦後、慧海のチベット潜入ルートを踏査し、慧海の再評価を主導した川喜田二郎も、慧海が『仏僧的もしくは明治人的イデオロギー』からチベット人を見ており、しばしば『道徳的非難めいた態度』をとったことを認めている(川喜田、1978)。

この河口慧海が 1902(明治 35)年、日本人であることが露見したためチベットを脱出してインドに入った際に奇しくも出会ったのが、大谷光瑞の西域仏跡探検隊であった。西本願寺の法主である大谷光瑞は、スヴェン・ヘディンの西域での古代仏教寺院の発見に触発され、発掘調査を行っていた。

この探検隊の随員の一人に島地大等がいた。島地大等は、新潟県生まれで西本願寺大学林高等科卒、盛岡の願教寺住職であった島地黙雷の養子となって島地家に入籍した。後に華嚴、天台教学の権威となり、東洋大学や東京帝大の講師をつとめ、著書も多数ある学者肌の僧であった。西域の仏跡調査では 1902(明治 35)年から 1903(明治 36)年にかけて、インドのほかにはネパールやスリランカでも調査を行なっている。

島地大等は、チベットで 10 年間修行した多田等観を支援していた。多田等観は秋田県出身で、西本願寺で修行時代にチベット人留学生を世話するうちにチベット語に習熟し、この留学生に付き添って心ならずも訪れたインドで、亡命していたダライ・ラマ 13 世に謁見する。チベット語を完璧にこなす等観はダライ・ラマに気に入られ、大谷光瑞の命もあって、チベットに駐留していたイギリスの眼を欺きつつチベットに入る。そして 1913(大正 2)年から 1923(大正 12)年まで修行を重ね、学位を得て帰国した。多くの蔵経などを日本に持ち帰ったが、その入手だけが目的ではなく、チベット仏教の真髄をチベット人とともに学んできた点で、慧海とは大きく異なるチベットとのかかわりを持ったといえる。

島地家では、失脚した大谷光瑞西本願寺法主のあとを継ぐまだ幼い大谷照公を養育しており、その身の回りの世話をした山田菊枝は、後に多田の妻となる。光瑞の失脚後送金が途絶えがちになり、経済的に窮した若い等観に、あきらめずに最後までチベット仏教を修めて帰国するようと手紙で励まし、またチベットで入手した資料についてどのような記録が必要かなどの学問的指導を行ったのが大等であった(江本、1994)。大等は菊枝に「等観はチベットに関しては世界 1、2 の人だから」と結婚を勧めたという。

等観は戦後、岩手県の花巻に住み、近くに住んでいた高村光太郎と親交を持つが、光太郎の日記には、等観が慧海の悪口を言っていたと記されている。チベットで同時期にラサにいた河口慧海と青木文教の間には、河口が持ちかえった大蔵経の日本における帰属をめぐる対立が生じ、同じ西本願寺の派遣留学生である等観は当然青木側の立場だったから、慧海に良い感情は

持っていなかったのであろう。しかしそこには、大蔵経入手の目的でチベットに潜入した慧海と、ダライ・ラマのもとで長期にわたって修学にうちこみ、チベットの文化社会にとけこんだ等観との、ダライ・ラマへの評価やチベット観の違いもあったように思われる。

等観は、その死後に発表された聞き書き(多田、1984)で、『チベットの文化が非常に程度の低い野蛮なもののように考えられているのは、真相を無視した誤った判断であって、永年の鎖国のためにチベットの文化がどのようなものであるか、一般に知れる機会がなかったのである。古来ラマ教を基礎として美術工芸、建築などに比類のない文化を持っているものとして、チベット人は優越感と自尊心とを持っている』としている。これは慧海によって形成された日本人のチベット観への異議申立て、という側面を持っていたように感じられる。しかし残念ながら等観は、その体験やチベット文化について詳しく著すことに熱意を示さなかった。慧海がもたらしたチベットのイメージを大きく変える一般向けの書物は、その後現れなかったのである。

ところで、宮澤賢治が18歳の時(1914年)に読んで深い感銘を受けたとされる「漢和対照妙法蓮華経」は、島地大等が鳩摩羅什訳の漢文を和訳したものである。賢治は中学3年生の1911(明治44)年8月に、盛岡の願教寺での島地大等の仏教夏期講習会に参加し、以後1912(明治45/大正元)年、1915(大正4)年にも島地の法話を聞いて、島地を見知っていた。金子(1994)は、宮澤賢治のチベットおよび西域のイメージを育んだ文献として、メモにも出てくるスヴェン・ヘディンの「トランス・ヒマラヤ」のほかに、状況証拠から読まれた可能性の高い本として、河口慧海の「西藏旅行記」、青木文教の「秘密之国 西藏遊記」、サー・オーレル・スタインの「カセイ砂漠の廃墟」、橘瑞超の「中亜探検」をあげている。橘瑞超は、大谷光瑞の西域仏跡調査隊の一員であった。金子(1994)が指摘しているように、賢治の周辺に、西域の調査に赴き、チベット留学中の多田等観と手紙のやり取りをしながら学問的指導を行い、結婚の世話までした島地大等がいたことは、賢治が育んだ西域やチベットへの興味関心と何らかの関係があるように想像される。

第二次世界大戦をはさんで、再び日本の一般社会においてチベット周辺が注目を浴びたのは、川喜田二郎による「ネパール王国探検記」(1957)と、「鳥葬の国」(1960)によってだった。特に「鳥葬の国」はベストセラーになり、そこに描かれたチベット文化圏の風俗、特に鳥葬はセンセーショナルに取り上げられ、注目を浴びた。同時に鳥葬の場面を含めて撮影された「秘境ヒマラヤ」は、国内では芸術祭文部大臣賞、ブルーリボン賞、毎日映画コンクール賞などを受賞し、海外でも国際探検映画祭のゴールデン・ネプチューン賞を取り、テレビでも数回放映され、撮影したカメラマンが執筆した本(大森、1960)も版を重ねた。ほかにも「チベット潜行十年」(木村、1958)、「秘境ブータン」(中尾、1959)などが出版された。

1953年から河出書房の世界探検紀行全集の刊行がはじまり、1956年に日本ではじめての探検部が京都大学に生まれ、1960年代には多くの大学で探検部が創設された。数々の「探検記」がベストセラーになり、テレビでもチベットだけでなく、アフリカや中南米などの「秘境」や「未開民族」の記録映像が放映され、「秘境・探検ブーム」といってもいいような興味関心が、日本社会に広がっていた。その背景には、日本の高度成長とともに海外渡航者が飛躍的に増加し、人々

が海外へ目を向けだした時、より進んだお手本である欧米とともに、より後進的な世界の存在が、日本の現在位置確認のために必要とされたのだろう。貧困と混乱の焼け跡から驚異的な復興を遂げ、高度成長の裏側で伝統的な景観や暮らし方を失いながら、先進国に肩をならべようとしていた日本が、未だ開発されざるものへの郷愁と憐憫をもって、鳥葬の死体をついばむ映像を受け入れた、という側面があったのであろう。そして、こうした「チベット」や「秘境」へのまなざしが、日本国内の開発が遅れた地域にも向けられていた。

### 3. 北上山地を形容する常套的な表現

北上山地についての形容によく用いられる表現として、「チベット」がある。ここにこう書くこと自体が、この表現を知らなかった人にまで、それとそれにまつわるある特定の見方を流布することになるのであり、筆者はそれを望まない。これまで書いた拙い文章の中でも、この表現を排除してきた。しかし今回はあえて、この言葉を正面から取り上げたい。それはこの表現こそ、これまで北上山地とそこに住む人々が、日本でどのようにとらえられて来たのか、その眼ざしを如実に語る表現であるからだ。

はじめて安家地区を訪れた 1982 年に、そこに暮らす人の口から直接これを聞いた。当時住んでいた茨城県から調査に来たことを話すと、「よくまあこんな山の中まで来たな」というねぎらいの挨拶の繰り返しのなかで、「こんなチベットに」といってその人は複雑な笑みを浮かべた。決してそのとき彼女は自分の住む場所を、ここは「チベット」であると認めたのではなかった。自らの生まれ育った郷土をわざと、世に言う「チベット」と表現した冗句であるとともに、いろいろな人が調査と称して安家を訪れ、それに協力し歓待しても、帰っていけば「安家は遅れたところ、辺鄙なところ、貧しい哀れなところだ」と世に広めている。そんな人たちが必ず使う決まり文句が「チベット」だ。あなたもここをそうとらえて、そんな秘めた意図をもって、はるばるここまでやってきたのでしょうか、違いますか？…そんな意味だったと、推測する。事実当時、安家地区では「調査公害」などといった批判もよく聞かれていた。

こうした場合に使われる「チベット」は、必ずしもその対象地域の実態が、現・中国チベット自治区に似ているという表現ではない。「ものいわぬ農民」(大牟羅、1958)は、最初の章のタイトルが「日本のチベット」であり、また本の帯は『日本のチベットといわれる岩手県一。』の一文ではじまる。同書は岩波新書の 1 冊として 1958(昭和 33)年に刊行され、毎日出版文化賞及びエッセイストクラブ賞を受賞しており、その後も版を重ねたことから考えても、日本全国にこの形容を広める大きな原動力になったことは想像に難くない。では同書ではこの表現にどのような意味あいを持たせていたのか。

大牟羅(1958)は『“日本のチベット” 性』として、多産多死、乳児死亡率が特に岩手県北地域で高いことをあげている。そして『“日本のチベット” と言われる岩手県』の特徴として、①北海道を除き全国一の面積、②耕地面積が総面積の 8 パーセントと全国平均の半分しかない、③県民一人当たりの所得は「貧しいといわれる東北六県の最低」、④人口密度は北海道を除き最低、⑤僻地にある学校数が多く、小規模校が多い、⑥長期欠席率全国一位、学童成績全国最下

位グループといった点をあげている。

おそらく大牟羅は、中国チベット自治区の乳児死亡率や学校の立地、欠席率、成績などまでを把握して、岩手県を「チベット」になぞらえたのではあるまい。「ものいわぬ農民」の冒頭は『日本のチベットと言われる岩手県の、そのまたチベットと言われる県北一九戸郡の僻地に生まれた私は、…』という文章からはじまる。『チベット』の後に二度も『と言われる』を挿入していることに注意したい。大牟羅としては、「チベット」は既に用いられている表現であり、それを自分も援用して使ったというのに過ぎないというスタイルをとっている。だからこの「チベット」という表現が、岩手県に用いるのが妥当かどうかには格別の吟味もなされず、『“日本のチベット”性』『“日本のチベット”と言われる岩手県の特徴』として描かれたのは、大牟羅自身が体感してきた岩手の農村についての問題意識であったとみて間違いなからう。しかし結果的には、この書物によってこの形容が全国的に広く人口に膾炙されるようになった。「チベット」に中国チベット自治区が持たない属性が加えられ、広く流布するようになったのである。

それではこの形容はいつごろから使用されはじめ、どのような過程をたどって広く知られるに至っていったのだろうか。

#### 4. 戦前の「チベット」を用いた表現

岩手県内の地域について「チベット」の語を用いた表現は、昭和8・9年の農村恐慌の時代に、当時岩手県岩手郡川口村村長であった村田幸之介が、村内の北山形および南山形地区の凶作の惨状を「まるでチベットみたいなひどい飢饉だ」と知事に陳情したところからはじまるとする説がある。岩手の文学史研究家の浦田敬三氏は、直木賞受賞作家で宮澤賢治研究家の森荘巳池氏からこれを聞いたという。前野(1976)も同様のことを述べている。

昭和14年に発表された岩手県出身の作家・石上玄一郎氏の、彼自身の体験をベースにした小説「魑魅魍魎」は、昭和はじめの小本街道の江刈村(現・葛巻町)から小川村(現・岩泉町)にかかる峠を舞台としている。この中で、愛知県からこの地方の衛生状態を視察に来た嘱託医が「いやまったくひどい処だ。これでもここは日本帝国の版図かね。え、まるで蒙古か西藏ぢやないか。…」と嘆く場面がある。ここで蒙古および西藏になぞらえられているのは、交通事情の悪さ、衛生状態の悪さ、稗などを主食にしている点である。嘱託医はこれに対して自らの出身地方の農村を、「人呼んでジャパン・デンマークといふ」と誇示している。

昭和初期に使われた村田、石上の「チベット」の意味するところは微妙に違う。村田の場合は凶作飢饉の現状をチベットに見立てているのだから、「飢餓」・「貧困」のイメージをチベットに重ね合わせたといえる。しかし石上のチベットは、チベットと蒙古を並べていることからわかるように、チベット独自の特性よりは、二国の地理的な隔絶性、近代的効率性の欠如、いわば「辺境」・「前近代性」のイメージから導かれたこのふたつの地域であるようにみえる。

このほか「毘沙門天の宝庫」(『春と修羅 詩稿補遺』)において、北上山地をトランスヒマラヤ高原になぞらえ、チベット地域に強い関心を持っていた宮澤賢治が、北上山地とチベットを結びつけた初源であるとする説(金子、1994 や米地、私信)もある。ただし、具体的に賢治が北

上山地に対して「チベット」という表現を使ったわけではない。

いずれにしてもこのような表現が昭和はじめには生まれていたことがわかる。しかも対象となった地域は、いずれも岩手県の北上山地の山村域であった。

ただし、当時この「チベット」を用いた表現が一般化していたかという点、そうではなかったと思われる。例えば、農村恐慌の時代に北上山地を含む農山村の実態を鋭く描いた文献、森(1929)、太田(1934)、高橋(1934)、岩手県(1937)、(貧窮する農村)などではこの表現は用いられていない。

## 5. 昭和 20 年代の「チベット」を用いた表現

表 1 は、「チベット」を地域の表現に用いた例を示したものである。表中の下閉伊郡は、岩手県内の安家村、普代村、田野畑村、有芸村、小川村、大川村、小本村、岩泉町、田老町、川井村、門馬村、小国村、新里村、山田町といった北上山地北部の地域を含む郡であった。

「チベット」を用いた表現には「岩手のチベット」、「日本のチベット」、「チベット地帯」、「秘境チベット」など様々な表現がある。昭和 20 年代では、28 例中、14 例が「岩手のチベット」およびそのバリエーションである「岩手チベット」、「岩手のチベット地帯」であり、「チベット地帯」が 6 例でこれにつぐ。この時期までは「チベット」を用いた表現では、岩手という県名と組み合わせる用いられることが非常に多かったのである。1948(昭和 23)年に九州の日田地方に「チベット」の表現を用いた例があるが、これは例外的なもので、その後昭和 20 年代に岩手県外の地域に「チベット」の表現を使用した例はみつかっていない。

一方、「チベット」に日本やニッポンを組み合わせた、この時期としては例外的な表現である 4 例、「ニッポンの西藏地帯」(大牟羅、1951)と「日本のチベット地帯」(農林春秋特派記者、1952)および「日本のチベット」(大牟羅、1952、1954)のうち 3 例は、大牟羅良が用いたものである。さきに、大牟羅は「チベット」を用いた表現を援用したスタイルをとっていたことを述べたが、しかし「岩手」ではなく「日本」に「チベット」を使用したのは早かったことが指摘できる。

大牟羅は 1909 年父母ともに小学校教員の家に生まれ、両親の勤務地であった岩手県北の農山村で育ち、17 歳から約 10 年間の代用教員を含む小学校教員生活の後、1938(昭和 13)年に満州帝国協和会に就職、1944 年臨時召集を受けハルピンで入隊後沖縄に出征し、敗戦後も 1946 年 11 月まで捕虜収容所に収容された後、岩手に帰郷した。

戦後岩手県は、海外・内地を合わせて約 7 万 7 千人が復員し、一般邦人引揚者も満州からの 8,852 人を筆頭に約 3 万人を迎え入れた。占領政策の一環として農地改革を行う一方で、これらの人々を対象とした失業救済のための緊急開拓事業を実施するなど、都市部からの疎開も含め、増加した人口を食わせていくための食料増産が大きな課題としてあった。そして、大牟羅もこうした復員者の一人であった。大牟羅は一時兄弟で開墾をしていたが、1947 年から 4 年間、古着の行商をおこなう。この時に見た農民の暮らしの見聞が、後の「岩手の保健」の編集に生かされたことが「ものいわぬ農民」で語られている。ただしこの時代に大牟羅が歩いた農村は、盛岡市北部近郊の農村と三陸の漁村であって、北上山地の中核域ではなかった。彼の北上

表 1. 「チベット」を地域の形容に用いた表現例

西暦(昭和)	表現	対象地域	出典
1933(昭和8)～ 1934(昭和9)頃	「チベットみたいないないひどい創鍾」	川口村 (現岩手町)	村田幸之助川口村村長による知事への陳情 (前野和久「岩手の再発見」1976年、熊谷印刷出版)
1939(昭和14)	「まるで蒙古か西蔵じゃないか」	葛巻町～岩泉町	石上玄一郎「懸崖絶壁」『日本評論』6月号
1945(昭和20)	「岩手のチベット」	不明(分校)	昭和20年当時の日記 (一条ふみ「淡き絶壁のために 戦時下北方農民層の記録」1976年、ドメス出版)
1947(昭和22)	「岩手チベット」	下閉伊	金野悟郎「岩手チベット! 下閉伊の農地改革」『岩手農地通報』第1巻第6号 岩手県農地部農地課
1948(昭和23)	「岩手のチベット」 「九州のチベット」	下閉伊	S生「岩手のチベット下閉伊の実体その鍵は今後の指導如何に」『岩手農地通報』第2巻第4号
1949(昭和24)	「西蔵」	日田	毛利小太郎「西日本・名勝者: 日田は九州のチベット」『九州春秋』第14年第139号 九州春秋社
1950(昭和25)	「岩手のチベット」 「岩手チベット」 「岩手のチベット」	晴山村	鈴木照一「西蔵の一角より晴山村実態調査中間報告」『岩手教育』第24巻第4号 岩手県教育研究所
		普代村・安家村 岩泉町・小川村・大川村・小本村・安 家村・有芸村・普代村・田野畑村・田 老町・宮古市・新里村・川井村・江刈 村	佐々木久蔵「わが郷土岩手県」清水書院 横田幸八「岩手縣新誌」日本書院
1951(昭和26)	「岩手のチベット」 「秘境チベット」「チベット地帯」 「岩手のチベット地帯」	安家村 岩泉町・小川村・大川村・小本村・安 家村・有芸村・田野畑村	伊藤登喜男「安家村を訪ねて」『岩手の保健』14号 岩手県国民健康保険団体連合会 奥山美智子「山奥の寒村に乙女の命ささげる愛の女教師の手記」『婦人生活』1月号 杉村広郎「岩手のチベット(1)」『岩手の保健』19号 岩手県国保連
1952(昭和27)	「ニッポンの西蔵地帯」 「チベット地帯」 「チベット地帯」 「チベット地帯」 「日本のチベット地帯」	有芸村・安家村・山形村 杉村「岩手のチベット(1)」と同じ 下北(下閉伊郡北部の略称) 北上山脈が縦走する九戸郡、下閉 伊郡、上閉伊郡	大牟羅良「夢のない村 一丸戸郡山形村、村生活の一断面」『岩手の保健』19号 岩手県国保連 杉村広郎「岩手のチベット(2)」『岩手の保健』20号 岩手県国保連 箱石文治「へき地外出」『北流』第8号 北流編集委員会 「ルポルタージュ・炭を焼く人々——東北のチベット地帯をゆく」『農林春秋』第2巻第4号 農林協会
1953(昭和28)	「日本のチベット」 「岩手チベット」「チベット地帯」 「岩手のチベット」 「岩手のチベット」 「岩手のチベット」	岩手の県北、山形村 岩泉町とその周辺域 山形村 有芸村 蔵川村	大牟羅良「青春のない村」『国民健康保健』第3巻第8号 「秘蔵の中心地岩泉」『朝日新聞』1月27日 大牟羅良「農村の世間体」『東洋文化』通巻12号 東京大学東洋文化研究所 「デタラメな有芸村」『朝日新聞』6月7日 「文部委も驚く辺地教育の実情」『朝日新聞』9月5日
1954(昭和29)	「岩手のチベット」 「和賀のチベット」 「岩手のチベット」 「日本のチベット」 「チベット地帯」	下閉伊郡 西和賀地帯 小本・安家村 安家村 安家村・有芸村	「忘れられた子供たち」『朝日新聞』1月10日 「辺地の実情スライドに」『朝日新聞』1月25日 村田孝介ほか「郷土のすがた岩手県 社会科副読本」琴城出版社 (発売・東山堂書店) R(大牟羅良)「日本のチベット安家村とお寺」『岩手の保健』38号 岩手県国保連 桑原武夫「しろと農村見学」『世界』11・12月号 岩波書店



山地の経験は、戦前の生育期や代用教員時代における見聞であったと思われる。そして大牟羅は、1951年から19年半の間雑誌「岩手の保健」の編集に携わった。

当時この雑誌は、中央の週刊誌・月刊誌に紹介されて一部の学者や文化人、ジャーナリストに注目され、1957年には発行部数は3500部に達していた(北河、2002)。しかし当初この雑誌の編集を大牟羅が引き継いだのは、この雑誌が完全にいきづまり、前編集者が投げ出した状態からであった。その「岩手の保健」の雑誌としての成功は、内容を新たに農民の声を伝える雑誌として企画したことと、その編集者たる大牟羅が、岩手の農民像の輪郭をある程度描いていたのと同時に、それを具体的かつ的確に一般読者むけに提示できる、ジャーナリスティックな言葉や文章のセンスと企画力を有していたことにあったのは間違いない。そして岩手県外からこの雑誌を購読した文化人らの間で、「チベット」を用いた表現は知られるようになっていったと思われる。

この時期に「チベット」を用いて形容された地域は、そのほとんどが岩手県の下閉伊郡北部を中心とする地域であり、「岩手のチベット」の用例が多いのは、岩手県のなかにある「チベット」という表現であるからだ。だから西和賀に「チベット」を使用する際には、「和賀のチベット」という表現になって、和賀地域内にあるチベットという表現になっている。このように昭和29年ごろまでは「チベット」を用いた表現は、岩手県の特定地域を形容する場合に、おもに岩手県に住む人によって用いられることが多かった。

しかもその使用は、佐々木(1949)や横田(1950)、村田ほか(1954)および昭和30年代初頭にあらわれる川本(1955)のような、地理学を専門とする研究者や中学・高校の教員による地誌学的著作に、時にはその地域を図示しながら取り上げられている。しかも村田ほか(1954)および川本(1955)は社会科副読本として刊行されたものであり、授業でこうした表現が取り上げられていた可能性が示唆される。

では実際にその内容を見てみると、その使用がもっとも早い佐々木久蔵は、岩手県教育研究所、岩泉高等学校長などを歴任した教員であり、「わが郷土3 岩手縣」(佐々木、1949)は、社会科郷土シリーズのNo.3として東京高師教授・浅香幸雄の責任編集で刊行された。1947年に「教育基本法」と「学校教育法」が成立し、新学制となって新設された社会科に郷土学習の内容が含まれていたため、こうした郷土学習の参考書が必要とされ、シリーズでの出版が企画されたのだと考えられる。本の扉には文部省社会教育局長の「推薦の辞」があり、「まえがき」では著者が編者らの熱意に動かされて約2ヶ月で執筆したと、本書成立の間の事情を説明している。第九章地方誌の二節「北上山地」の〔2〕小本川・閉伊川流域(イ)小本川流域の項で、『小本川流域を中心として、普代、田野畑、小本、有芸、大川、小川、安家、岩泉などの諸町村がある。北からの県道は普代で止まり、南からの県道は小本で止まるから、普代—小本間の交通は絶えている。普代・安家地方は特に交通不便の所である。普代から宮古にくるには、宮古へ船の便がないので、久慈に出、盛岡を廻って三日がかりで宮古に達する。安家は普代の西に位し、普代にまさる交通不便の所である。岩手のチベットといわれるのは、これらを中心とする地方をいうのであって、こんな不便な土地だけに、古いしきたりが今なお多く残っている。』と述べている。

具体的な記述から見て、佐々木はこの地域における交通の便について、よく知っていたものと推測される。そしてこの地域の特徴として述べられているのは、交通が不便であり、古いしきたりが残っており、人口密度が希薄な点である。

次の横田幸八は、立正大学地理歴史科を卒業後、岩手師範学校の教授を経て、戦後新制の岩手大学教授となり、岩手の教員養成にあたってきた。後には東北学院大学の教授となっている。「岩手縣新誌」(横田、1950)は、田中啓爾(東京文理科大学名誉教授)が監修した郷土新書の岩手県版で、全都道府県版と総論からなる47冊の1冊である。この第八章の第二節が「岩手チベット」というタイトルで、『世界の屋根といわれるパミール高原より東に走るコンロン山系と、ヒマラヤ山系の間にあるのがチベット高原である。チベットは次の七つの地理的個性をもつ。1. 山岳重疊する廣い高原性をもつこと 2. 人口稀薄であること 3. 将来性ある潜在資源を保有してあること 4. 交通機関が不十分であること 5. 他地域との隔絶性を有すること 6. 特殊生産形態を有すること 7. 風俗習慣に特殊性を有すること かかる類似の地域をチベットと呼ぶなら、現在において本縣にもチベットの地域を発見することができる。これを一應岩手のチベットと呼ぶことにする。』と述べており、学術的なタームとしてこの「岩手のチベット」を定義づけようとする努力のあとが見てとれる。その対象地は「岩手チベット地域」として図示されており、図1に引用した。現在の市町村域で言えば、宮古市、新里村、川井村、田老町、岩泉町、田野畑村、普代村、山形村、葛巻町を含む一帯ということになる。『酪農経営と氣候につよい種が重要な生産物となるし、潜在資源の無盡藏、顯在資源の利用化は交通機関の整備とともに岩手のチベットの前途は明るい。即ち酪農総合計画、石灰岩・大理石の搬出、林産物の利用、水力発電の増加等の開発計画がそれである。』と「岩手のチベット」の明るい未来を描いている。

横田(1950)は、地理学的な立場からの定義づけを試みながら「岩手のチベット」が用いられている点が印象的である。戦後の「チベット」を用いた地域表現は、僻地勤務の教師の間でおこなわれたものが表1にも見られるのだが、岩手の師範学校の教授であった横田が、この「チベット」を用いたことが関係しているのかもしれない。なお、同様の趣旨の図を川本(1955)も示しているので、図2にあわせて転載した。

村田孝介は小学校教員や岩手県教育センターに所属した経歴を持ち、その後も小学校4年生むけの『あたらしいきょうど』(岩手県社会科教育研究会、1963、1967など)の編集執筆者に名を連ねている。しかし『あたらしいきょうど』においては「チベット」を用いた表現はみられない。村田ほか(1954)は、東北大学理学部教授・田辺健一校閲による、『郷土のすがた岩手県 社会科副読本』で、第八章「処誌」の3節「牧農と地下資源の北上山地」の④「小本、安家川流域」の項で、最初の行に『岩手県で最も交通にめぐまれない地域で、岩手のチベットといわれる程で、安家村はごく最近バスが開通したばかりである』とある。「チベット」の定義づけではなく、流域ごとの記述に使用されている点など、佐々木(1954)との共通性が感じられる。交通が不便であること以外では、人口密度の低さ、古い習慣・言葉の残存などが地域の特徴としてあげられているのも、佐々木(1954)の指摘とよく似ている。

村田ほか(1954)では、最後に「岩手の総合開発 一結び」の章が設けられている。当時、「国

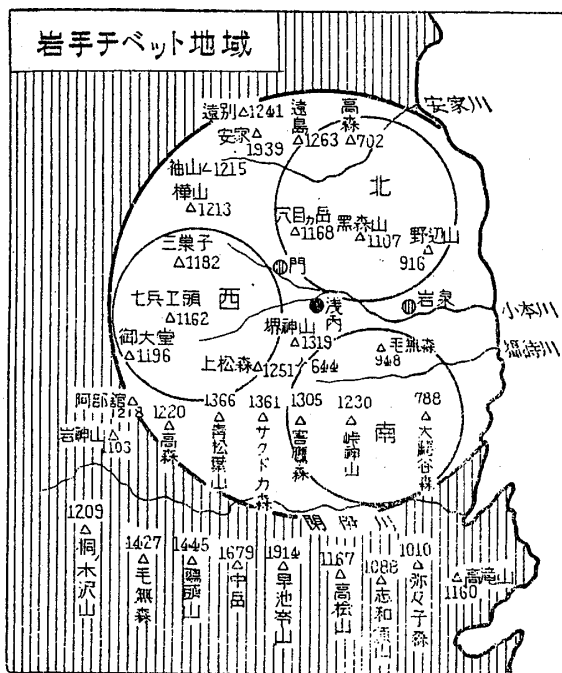


図1.「岩手チベット地域」(横田、1950より引用)

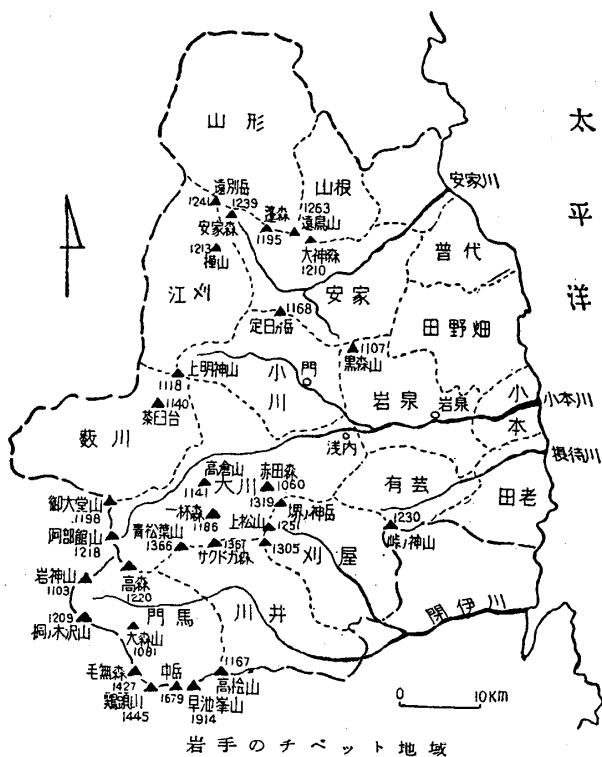


図2.「岩手のチベット地域」(川本、1955より引用)

土総合開発法」にもとづいて、岩手県の「北上特定地域」の開発が、その指定を受けて進められていた。その内容は①北上川の本支流に電源開発用のダムを作り、同時に河川の氾濫を防ぎながら農業用水として利用する、②電力は良港のある三陸海岸に送り、北上山地の地下資源を利用した臨海工業地帯を作る、③北上川上流地域(盛岡～黒沢尻)にも電力を送り、工業地帯化する、④これらの計画のために、鉄道網や港湾の整備をおこない、道路の補修新設を進めて交通を便利にする、⑤農業関係では、北上河谷平野における土地改良区の設置による灌漑排水事業で裏作を可能にし、山間地帯には小水力発電所を設けて酪農や畜産、農村工業を盛んにさせ、北上山地の牧野原野には一大酪農地帯を作り酪農製品の製造をおこなう、というものであった。

どうしてこのような計画が必要なのか、村田ほか(1954)はこう述べている。『今まで調べてきたように、岩手県の面積は大きくて四国位、日本随一である。しかし人口密度は90.9人という最低である。どうしてこんなに人が少いだろうか。わが郷土は人を養うだけの力がそんなに劣っているだろうか。いやそうではなかった。地下資源、水産資源、林産資源にしる、全国に珍しい程多くあるのだ。いったいそれはどうしたわけだろうか。ただこれを充分に活用するだけの経済力がなかったのだ。岩手県の一人あたりに所得金額は全国最低である。つまり貧乏であったわけである。すぐれた資源と土地を切り開いていくことや、農民が土地や農業の技術を改善したり、漁民が漁法、漁具の改善しようと思っても、貧乏で充分行なうことができなかった。何よりも、県民一人一人すべての人の貧乏をなくすことである。』

そして同じ章の「10年後のわが郷土」の項では、『このようにして10年後には県民一人平均の所得が1950年(昭和25年)の1.73万円の2倍の3.78万円に増加するという計画である。もしもいつまでも県民の所得がこのままであるか、大多数の人々の貧乏がなおつづくとしたならば、これは県民のために役立たない総合開発である。われわれはこの総合開発計画に協力して、県民のために県民の手によってなされて始めて、岩手県の人々は富み栄えるであろう。』と全体を結んでいる。このように当時の岩手県の抱える問題を解決し、岩手における高度経済成長を可能にするための方策として、この総合開発計画が重視され、積極的に教育の場で計画の浸透が図られていたのである。そしてこうした動きのなかで、岩手でもっとも貧しい地域としての「岩手のチベット」が、県として大きな政策課題になっていただろうことは想像に難くない。

1948(昭和23)年建設省は、「地方計画策定基本要綱」による「特定地域総合開発計画」の提出を各都道府県に求めた。岩手県は、石灰岩や大理石などの地下資源や膨大な森林蓄積を誇る林産資源を有し、明治以来酪農が定着していながら、開発が遅れている安家地域を、大船渡地域とともに選定し、申請をおこなった。結局この両地域は、投資効果の問題、未開発地域にこだわりすぎ国家の復興に資するという観点が弱かったこともあって指定されることはなかったが、当時から岩手県は、下閉伊郡に属し北上山地の中核に位置する安家地域の開発の遅れを課題として認識していたことが伺われる。

1950(昭和25)年「国土総合開発法」が制定され、国が特定地域を指定して開発することとなり、岩手県では前回の指定漏れの反省に立って、県独自の総合開発計画案を作成し、先手を打って指定の要請書を提出することにした。そして岩手県開発の基本方針を、「県民の経済的発展と生

活水準の全面的向上並びに人口収容力の増大を図り、もって日本産業経済の再建に寄与することを根本とする」と定めた。1951(昭和 26)年、この岩手県総合開発計画が策定され、これが基礎となって、その年県南域から宮城県にまたがった北上特定地域が、1958(昭和 33)年には県北域が含まれる北奥羽特定地域が指定され、全県がカバーされることとなった。

こうして岩手総合開発計画が立案されていくなか、岩手県教育研究所では 1952(昭和 27)年に、教育内容の各段階に応じて総合開発計画の具体的資料を盛り込んで教材として活用するために、「岩手の総合開発＝構想と概観＝」を刊行した。社会科副読本において岩手の総合開発計画についての記述に重点がおかれているのは、このような開発を推進する岩手県の時代・社会的背景があったのである。そしてそのなかでもっとも開発の遅れた地域に対して社会科副読本が与えたのが、「岩手のチベット」という形容だったのだ。しかしこの時期の「岩手のチベット」には、開発は遅れているものの、地下の鉱物資源や森林資源を豊富にかかえ、その搬出のための交通手段や、工業化の方途さえ整えば巨万の富をもたらす、いわば眠れる獅子のようなイメージをあわせて付与されていたことが指摘できる。だからその開発が、岩手県全体の発展にも寄与すると考えられていたのだと思われる。

なおこのころには「チベット地帯」という表現もみられるが、この表現を用いたなかで注目されるのは、1954(昭和 29)年に雑誌「世界」11・12 月号に掲載された桑原武夫による「しろうと農村見学」である。「国民所得が全国最低、幼児死亡率が最高の岩手の中でも一ばん遅れた地帯、大牟羅、中野兩氏も訪れたことのない安家、有芸など、いわゆる「チベット地帯」を歩いてみよう」と、桑原は岩手にやってきた。引用部分の大牟羅氏は大牟羅良、中野氏は当時農地解放での解放率日本一といわれ、『新しい村づくり』を出版していた江刈村村長の中野清見で、特に中野はこのとき以来、桑原と親交を重ねた。

桑原は江刈村、安家村、有芸村を廻り、見聞を重ねたが、その視点は農地解放に成功し新たな村づくりが進められる江刈村と、彼の眼からは旧態依然に見えた安家村や有芸村の姿の対比に重点があったようである。彼は安家村で高額の資金を投じて新たに寺が建てられたことに、『ヒエさえ食いかねるこの寒村に』と不思議の念を禁じえず、このことを「岩手の保健」編集部で大牟羅にも語った。これが「岩手の保健」でも報じられ、桑原から発言のニュアンスの違いを指摘する抗議が投稿され、大牟羅は次の号で謝罪している。「しろうと農村見学」における「チベット」を用いた表現が、当時のインテリ層で権威のあった「世界」に掲載されたことで、岩手にあるその地帯を広く知らしめた効果は大きかったと推察される。

## 6. おわりに

日本ではチベットに対して、時代的背景や紹介者の影響、ジャーナリズムの取り上げ方もあって、「秘境」「未開」のイメージが強かった。昭和 20 年代の復興期において「チベット」を用いた地域の表現は、主として岩手県内で用いられ、岩手県内の開発が必要と考えられていた地域を表現するために用いられることが多かった。昭和初期にいわゆる東北の農村恐慌で苦しみ、満州への開拓武装農民を多く輩出した岩手県が、その引揚者も引き受けつつ戦後の復興を

成し遂げるために努力を重ねた時期において、開発を必要と考えられた地域が強く意識されたところからこのような表現が多用されたといえるだろう。

ところが、現在調査中ではあるが、昭和30年代に入ると、昭和30年だけで14例中7例が「日本のチベット」、昭和30年代の総計では39例中23例が「日本のチベット」という表現が用いられるようになり、「岩手のチベット」は6例に過ぎない。昭和40年代では17例中13例が「日本のチベット」で、「岩手のチベット」の例はなく、この表現は完全に駆逐されてしまう。大牟羅良の著作などから「日本のチベット」＝岩手県と理解した人が多かったから、昭和20年代に岩手県の特定の地域を「チベット」を用いた表現で呼んでいた岩手の人々が、昭和30年代以降、逆に岩手県の一員としてその表現で呼ばれる、逆転現象が生まれていった。

ここからの展開については、また別稿で詳述する予定である。「〇〇のチベット」という表現についての起源や用例について情報をお持ちの方は、ご教示いただければ幸甚である。

参考文献（下記のほか表1を参照）

- 北河賢三「大牟羅良と『岩手の保健』」『年報日本現代史』第8号現代史料出版（2002）
- 川喜田二郎「ネパール大探検記」光文社（1957）
- 川喜田二郎「鳥葬の国」光文社（1960）
- 川喜田二郎・高山龍三「ヒマラヤ」保育社（1962）
- 川喜田二郎「序文」『チベット旅行記』河口慧海 白水社（1978）
- 川喜田二郎「事実とロマン」『第二回チベット旅行記』河口慧海 講談社学術文庫（1981）
- 多田等観「チベット滞在記」白水社（1984）
- 金子民雄「宮沢賢治と西域幻想」中央公論社（1994）
- 木村肥佐生「チベット潜行十年」毎日新聞社（1958）
- 中尾佐助「秘境ブータン」毎日新聞社（1959）
- 大牟羅良「夢のない村」『岩手の保健』第19号（1951）
- 大牟羅良「日本のチベット 安家村とお寺」『岩手の保健』第38号（1954）
- 大牟羅良「ものいわぬ農民」岩波新書（1958）
- 前野和久「岩手の再発見」熊谷印刷（1976）
- 石上玄一郎「繪姿」中央公論社（1976）
- 大森栄「秘境ヒマラヤ」二見書房（1960）
- 無明舎出版「新聞資料東北大凶作」無明舎出版（1991）
- 桑原武夫「しろうと農村見学（一）」岩波書店『世界』（1954）11月号
- 桑原武夫「しろうと農村見学（二）」岩波書店『世界』（1954）12月号
- 青木文教「秘密の国 西藏遊記」内外出版株式会社（1920）
- 佐々木久蔵「わが郷土3 岩手縣」清水書院（1950）
- 村田孝介・多田誠一「郷土のすがた 岩手県」琴城出版社（1954）
- 横田幸八「郷土新書3 岩手懸新誌」日本書院（1950）

- 川本忠平「新しいふるさとの姿」開成館（1955）  
中野清美「あたらしい村づくり」新評論社（1955）  
江本嘉伸「西藏漂白 上・下」山と溪谷社（1994）  
森庄己池「山村食料記録」未知谷（1929）  
高橋康文「米のない村」『グラフィック』（1934）第3巻第22号（『山村風物帖』三教書院（1939））  
太田俊穂「凶作地獄」文芸春秋『文芸春秋』（1934）12月号  
長江好道ほか「岩手県の百年」山川出版社（1995）  
岩手県「昭和9年岩手県凶作誌」山口活版所（1937）  
岩手県教育研究所「岩手の総合開発」岩手教育研究所（1952）  
岩手県地域課題設定委員会「岩手県地域課題解説書」岩手県教育庁（1951）

## How the “KITAKAMI mountain country” was described in the Showa postwar revival period

In Japan, many people in past times imagined Tibet as an "uncivilized", "unexplored" region. These conceptions were based on the journalism of the day, the influence of the particular individuals introducing Tibet, and the general historical background.

In the revival period of the Showa 20s, the term "Tibet" was applied to the Iwate prefecture. In most cases this indicated the area's need for development, Iwate had lost many farmers who had settled in Manchuria, and the area suffered greatly under the farm village depression of the early Showa years. Iwate's postwar revival depended heavily on resettlement, including many repatriated farmers. Use of the "Tibet" reference reflected awareness of this need for development.